

「おかえりなさい、乙志くん」

金曜日の夜。仕事を終えて自宅の扉を開けると、消して出たはずのリビングに明かりがついていた。

玄関には、見覚えのない黒い革靴がきちんと揃えられている。息を止めた瞬間、部屋の奥から低く穏やかな声が聞こえた。

「遅かったですね。今日は二十分も残業していたんですか」

知らない男が、僕のソファに座っていた。

短く整えた黒髪に、濃紺のシャツ。テーブルには僕のマグカップが置かれ、その隣で銀色の鍵が照明を反射していた。

僕の持っている鍵と同じ形の合鍵だった。けれど、寝室の引き出しにしまっている僕の合鍵を、この男が持ち出したとは限らない。

「だ、誰……ですか……？」

「初めまして。森田匠翔です」

そう名乗った男が立ち上がる。僕が動けずにいるうちに横を通り過ぎ、肩へ掛けていた鞆を取り上げた。鞆を玄関脇へ置くと、開いたままだった扉を閉める。鍵を回し、チェーンまで掛けた。

整った顔立ち。口元には安心させるような微笑みがあるのに、まっすぐ向けられた目だけは少しも笑っていない。

「ど、どうして、僕の家にいるんですか……？」

「乙志くんを待っていました」

「ち、違う……どうやって、入ったんですか……？」

「その鍵で。先週、乙志くんが店で落とした鍵を拾いました。気づかれる前に型を取り、足元へ戻したんです」

男はテーブルの合鍵へ視線を落とした。

僕は後ずさり、背中で玄関の扉を押し開けようとした。けれど動かない。振り返ると、いつもは使わないチェーンまで掛けられている。

「あ、開けて……ください……」

「まだ帰せません」

「け、警察を呼びます……」

「携帯なら、乙志くんの鞆から預かりました」

玄関脇へ置かれた鞆を見る。外ポケットに入っていたスマートフォンだけが抜き取られている。

「か、返してください……」

「話が終わったら返します」

「あなたなんて、知らない……今日、初めて会ったのに……」

「ええ。乙志くんにとっては、今日が初めてです」

男はゆっくり近づいてきた。

「私は半年前から、乙志くんを見ていました」

「な、何を……言ってるんですか……」

「朝、何時に家を出るか知っています。帰りに寄る店も、疲れた日に買うプリンも、雨の日だけ歩くのが少し速くなることも」

一つ告げられるたび、背中が冷たくなる。喉が張りつき、助けを呼ぼうとしても声が出ない。

僕が震える脚で下がると、男は同じだけ距離を詰めた。

「部屋へ入ったのは、今日が初めてじゃないんですか」

「はい。乙志くんが仕事へ行っている間に、何度か」

「か、勝手に……？」

「すみません。どうしても、乙志くんが暮らしている場所を知りたかった」

低く謝る声は震えていた。それでも足は止まらない。

逃げようと玄関のチェーンへ手を伸ばす。指が金具へ届く直前、その手首を後ろから掴まれた。

「は、離して……ください……」

「離したら、私を追い出すでしょう」

「あ、当たり前です……」

「だから離せない」

腰へ回った腕は震えていた。それでも力は強く、振りほどけない。知らない男の匂いが近すぎる距離から押し寄せ、息が浅くなる。膝から力が抜けそうになっても、男の腕が身体を立たせた。

男は僕を抱え込むように、玄関からリビングへ戻した。間取りも家具の位置も知り尽くしているように、一度も迷わない。

「何度も声をかけようと思いました。でも、乙志くんが私を知らないことに耐えられなくなった」

「……っ」

「朝起きると、最初に乙志くんの部屋を見ます。仕事が終われば、この部屋の明かりを確かめに来る。乙志くんが誰かを好きになるかもしれないと考えると、何も手につかない」

男は一度言葉を切り、テーブルに置いていた鍵を指先でつまみ上げた。

それを僕へ見せつけるように、もう一度テーブルへ置く。

かちん。

僕はすぐ鍵へ手を伸ばした。けれど、その上から男の手が重なり、テーブルへ押さえつけられる。

「私が触ったら、乙志くんはどうしますか」

男の顔が近づく。僕はとっさに顔を背けた。けれど顎を掴まれ、無理に正面へ戻される。

「やめ……」

最後まで言う前に、唇を塞がれた。

「んっ……♡んう……っ♡あ、あ……っ♡」

テーブルへ押さえられていた手首を引かれ、後ろへ押される。背中が壁へ当たった。胸元を押し返そうと伸ばしたもう片方の手も掴まれ、両腕を頭の上へ持ち上げられる。

手首を壁へ押しつけられた。顔を背けても顎を掴まれ、男のほうへ戻された。

「ちょ、っと……やめて……♡」

「逃がしません♡」

「初めて会った人と、こんなこと……っ♡」

「私は、ずっと乙志くんを知っていました♡」

「僕は今日、初めて会ったんです……♡」

「なら、今日から私を知ってください♡」

穏やかな声とは反対に、手首を押さえる力は少しも緩まない。顔を逸らそうとした僕を追い、もう一度唇を重ねてきた。

ちゅっ♡ちゅうっ♡

ちゅうっ♡ちゅぷっ♡

「んう……っ♡ふ、う……♡ひゃっ……♡んっ……♡」

唇の隙間へ舌が入った。逃げる舌を追いかけられ、絡め取られる。

くちゅっ♡ちゅるっ♡ちゅぷっ♡

くちゅくちゅっ♡ちゅるっ♡くちゅっ♡

「んんっ……♡んうう……っ♡」

抵抗していた指先から力が抜ける。男はそれに気づいても、掴んだ両手

首を壁へ押しつけたままだった。

「や、やめ……っ♡離して……っ♡」

「離せません♡」

「知らない、人なのに……っ♡」

「私はずっと乙志くんだけを見ていました♡」

ちゅっ♡ちゅうっ♡くちゅっ♡

「んっ♡んう……っ♡ふ、あ……っ♡ふあ……っ♡や、あ……っ♡」

唇を離した男は、困ったように眉を下げていた。強引に迫った本人のほう
が泣きそうな顔をしている。

なのに、僕が逃げようとするとうち腰へ腕を回し、身体をびったり重ねてき

た。

「半年、触れたかった♡」

「こ、怖い……っ♡やめて……♡」

「もう我慢しません♡」

首筋へ唇が触れる。

ちゅっ♡ちゅうっ♡

ちゅうっ♡ちゅぷっ♡

「ひゃっ……♡あ、あ……っ♡あっ……♡んんっ……♡」

「ここ、弱いんですね♡」

「し、知らない……っ♡やあ……♡」

「私は、乙志くんの弱いところまで調べました♡」

耳の下を吸われ、肩が跳ねる。男は僕の反応を確かめるように、同じ場所へ何度も口づけた。

ちゅっ♡ちゅぷっ♡れろっ♡

ちゅうっ♡くちゅっ♡れろれろっ♡

「んっ♡あ……っ♡ひゃっ♡や、あ……♡んあ……っ♡ふう……っ♡」

「乙志くんの声も、こうやって震えるところも、ずっと近くで知りたかった♡」

男は離れず、今度は首筋の同じ場所へ強く吸いついた。

ちゅうっ♡ちゅぷっ♡

ちゅぷっ♡くちゅっ♡

「ひゃっ♡やめ……跡、ついちゃう……っ♡やっ……♡ひ、う……っ♡」

「つける♡」

「やめて……見えるところは、困る……♡」

「困って。明日、鏡を見るたびに私を思い出して♡」

舌で濡らされた場所を、もう一度強く吸われる。

ちゅううっ♡ちゅぷっ♡

ちゅぷっ♡くちゅっ♡

「んあっ♡やっ♡しつこい……っ♡ああ……っ♡んっ……♡」

「半年も乙志くんを見ていただけだった。これくらいじゃ足りない♡」

「跡が消えなくなる……っ♡」

「消える前に、またつけに来る♡」

男は赤くなった場所を指でなぞり、満足できないように、そのすぐ隣へ

唇を押しつけた。

ちゅっ♡ちゅうっ♡れろれろっ♡

ちゅうっ♡ちゅぷっ♡ちろちろっ♡

「ひあっ♡あっ♡またあ……っ♡ひゃあ……っ♡ふ、あ……っ♡」

「乙志くんの匂いも、肌の柔らかさも、全部覚えたい♡」

「や……っ♡そんなに、近づかないで……♡」

「嫌だ。勝手にこの部屋へ入ったとき、乙志くんの枕へ触れるのも我慢したんです♡」

囁きながら、男は首元へ顔を埋めた。呼吸するたびに鼻先と唇が肌を擦り、くすぐったさと熱が混ざっていく。

「乙志くんが今日まで私を知らなくても、私は乙志くんのことを何一つ忘

れなかった♡」

「やめて……っ♡分からない……っ♡」

「何度でも言う。乙志くんが私と同じくらい忘れられなくなるまで♡」

腰を抱く腕が強くなる。服越しに触れた男の身体も熱かった。

「こんなに好きなのに、知らないふりをして見ていました。もう我慢しませんでした♡」

「ち、違う……僕は……っ♡」

「私のことしか考えられなくします♡」

男の手がシャツの裾から入ってきた。

「だ、駄目……っ♡ひっ……っ♡」

「怖がっても、もう離しません♡」

「や……っ♡待って……っ♡」

「待てません♡」

冷えた指先が脇腹を撫で、背中へ回る。シャツの裾がゆっくり捲り上げられた。

「ま、待って……っ♡ここ、リビング……っ♡」

「寝室まで行ったら、逃げるだろ♡」

「に、逃げる……っ♡」

「だから、ここで触る♡」

男の手がシャツの上から胸を包んだ。

「ひっ……♡」

胸板を掌で撫でられただけで、身体が男へ寄ってしまう。誰にも触れられたことのない場所が、初めての熱へすぐに反応した。

「ずっと、こうして触れたかった♡」

「ひっ……♡や……指、そこ……っ♡」

「乙志くんのことなら、何でも覚えています♡」

片方の胸を持ち上げられ、乳首を指で探られる。

こりっ♡

こりこりっ♡

「ひゃあっ……♡あっ♡んう……っ♡あ、あ……っ♡」

「ここも、ずっと触りたかった♡」

「や……っ♡触ら、ないで……っ♡」

「嫌だ♡」

穏やかな声に似合わない、短い拒絶だった。

シャツのボタンが一つずつ外される。止めようと伸ばした手を掴まれ、頭の上へ押し上げられた。

「乙志くんは、すぐ隠すから♡」

「み、見ないで……っ♡」

「半年も服の上からしか見られなかった。今日は隠させない♡」

開いたシャツの間から、薄い胸板が露わになる。男の視線が落ち、恥ずかしさで顔が熱くなった。

「見ないで……♡」

「綺麗♡」

「言わないで……っ♡」

「遠くから見ているだけでは言えなかった。乙志くんが綺麗だと、ずっと思っていました♡」

男が胸へ顔を寄せた。

ちゅっ♡

ちゅうっ♡

「あっ……♡ひ、う……っ♡ひゃっ……♡んっ……♡」

乳首へ口づけられ、舌先でゆっくり舐められる。

れろっ♡れろれろっ♡

れろれろっ♡ちろちろっ♡

「んうっ♡ふぁ……っ♡あっ♡ふぁ……っ♡や、あ……っ♡」

「可愛い♡」

「やぁ……っ♡そんな、舐め……っ♡あっ……♡んんっ……♡」

反対の乳首も指で摘まれた。

こりっ♡こりこりっ♡

こりこりっ♡くにくにっ♡

「ひゃんっ♡あっ♡りよ、両方……っ♡んぁ……っ♡ふう……っ♡」

「どうして？♡」

「分かん、ない……っ♡やぁ……♡」

「なって。私の前でだけ、変になって♡」

男はおどおどした顔のまま、指と舌だけを執拗に動かした。

れろっ♡ちゅぷっ♡こり♡こりこりっ♡

れろれろっ♡くちゅっ♡こりこりっ♡くにくにっ♡

「んっ♡ああ……っ♡ま、待って……♡やっ……♡ひ、う……っ♡」

「半年待った♡」

「ちが……ひあっ♡あっ♡」

乳首を軽く吸われ、膝から力が抜けた。男の腿にしがみつくように身体を預ける。

「ほら、立てなくなってる♡」

「や……っ♡力、入らない……っ♡」

「もっとする♡」

腰を抱かれ、リビングのソファへ運ばれた。背中がクッションへ沈む。男は僕の上へ覆いかぶさり、開いたシャツを肩から脱がせた。

「返して……♡」

「あとで♡」

脱がされたシャツがテーブルへ置かれる。上半身を隠そうとした腕を掴まれ、左右に開かれた。

「や……っ♡恥ずかしい……♡♡」

「私しか見てない♡」

「こ、怖い……っ♡見ないで……♡♡」

「なら、今夜で恋人になります♡」

男はそう言い、胸の間へ顔を埋めた。

ちゅっ♡ちゅうっ♡れろっ♡

ちゅうっ♡ちゅぷっ♡れろれろっ♡

「んあ……っ♡や、あ……♡ひっ……♡ああ……っ♡んっ……♡」

舌が薄い胸板を這い、乳首へ戻る。強く吸われるたび、下腹部の奥まで
甘く痺れた。

ちゅぷっ♡ちゅううっ♡

くちゅっ♡ちゅぷっ♡

「あっ♡そこ……っ♡だ、め……っ♡ひゃあ……っ♡ふ、あ……っ♡」

「ええ。今、分かりました♡」

男は口を離さず、硬くなった乳首だけを舌先で何度も弾いた。

れろっ♡れろれろっ♡ちろっ♡

れろれろっ♡ちろちろっ♡れろっ♡

「ひゃあっ♡あっ♡そ、そんな……っ♡んう……っ♡あ、あ……っ♡」

「ここを舐めると、声が高くなるんですね♡」

「知らなくていいのに……っ♡」

「忘れません。乙志くんがどこを何回舐めると震えるか、何度も想像して
いました♡」

反対の乳首は指で摘まれ、舌と同じ速さで転がされる。

こり♡こりこりっ♡れろれろっ♡

こりこりっ♡くにくにっ♡ちろちろっ♡

「んあっ♡あっ♡りよ、両方……っ♡ひゃっ……♡んっ……♡」

「どうして?♡」

「やあ……っ♡ひゃっ♡むり……っ♡ふあ……っ♡や、あ……っ♡」

「それがいい♡」

左の乳首を吸われながら、右の乳首を強く摘まれる。次は口と指が入れ替わり、濡れた乳首へ熱い舌が巻きついた。

ちゅぷっ♡れろっ♡こりこりっ♡

くちゅっ♡れろれろっ♡くにくにっ♡

「ひゃんっ♡ああっ♡やっ♡やあ……っ♡あっ……♡んんっ……♡」

「乙志くんの胸、私が触るとすぐ硬くなる♡」

「言わないで……っ♡」

「言う。私の指で感じているって、何度でも乙志くんに聞かせたい♡」

男は胸板へ両手を添え、左右の乳首を指で起こした。二つを舌で交互に舐められ、身体をよじつても逃げられない。

れろっ♡れろっ♡ちゅっ♡ちゅぷっ♡

れろれろっ♡れろれろっ♡ちゅうっ♡くちゅっ♡

「あっ♡んうっ♡そこ、ばっかり……っ♡んあ……っ♡ふう……っ♡」

「逃げて、離しません♡」

「ひっ……♡や、あ……っ♡」

乳首を唇で挟まれ、前歯を当てないよう柔らかく引っ張られる。

ちゅうっ♡くにっ♡

ちゅぷっ♡こりっ♡

「ひああっ♡や……っ♡ああ……っ♡やっ……♡ひ、う……っ♡」

「声を我慢しないで♡」

「や……っ♡聞かないで……っ♡」

「全部聞かせて♡」

指で摘む動きが速くなり、口では同じ場所をしつこく吸われた。

こりこりっ♡ちゅぷっ♡ちゅううっ♡

くにくにっ♡くちゅっ♡ちゅぷっ♡

「あっ♡ああっ♡や、あ……っ♡♡あ……っ♡んっ……♡」

「うん。半年分、もっと聞かせて♡」

男の手がズボンのウエストへ触れた。

「ま、待って……っ♡そこは……っ♡」

反射的に腰を引いた。服の上からなら分からない。けれど、ズボンを下ろされたら、普通の男とは違う身体を見られてしまう。胸を押していたときとは違う焦りで、指先が震えた。

「僕……普通の、男と違って……っ♡」

「知っていますよ♡」

「え……？」

「乙志くんがカントボーイだということも、知っています♡」

男は驚きも戸惑いも見せなかった。むしろ最初からそこへ触れるつもりだったように、ズボンの縁へかけた指を離さない。

「ど、どうして……そんなことまで……っ♡」

「この部屋に入ったとき、洗面台の奥にしまっていた検診結果を読みまし